

上村遺跡緊急発掘調査概報

伊那市教育委員会

上村遺跡緊急発掘調査概報

伊那市教育委員会

一、はじめに

上村遺跡が、遺跡地として登録されたのは故藤沢宗平氏が信濃史料編纂の時に当地を实地調査された以後のことである。

今回の発掘調査に着手するまでの経過は次のようである。手良地区の農村総合整備事業（パイロット事業）は、昭和五十二年度から着手され、遺跡地としては昭和五十二年では砂場遺跡、昭和五十四年度の上村遺跡の二つが該当した。砂場遺跡発掘調査報告書は昭和五十三年三月に刊行されている。上村遺跡は調査団側の都合で遺跡の存在しそうな場所を休耕にしていたとき、調査上に困難な問題が生じない措置を講じた。発掘に着手する前に、伊那市教育委員会を中心にして、上村遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。手良土地改良区理事長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結した。

二、調査の組織

上村遺跡発掘調査会

調査委員会

三、位置

委員 長	伊沢 一雄	伊那市教育委員会教育長
副 委員 長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委 員	赤羽 映土	伊那市教育委員長
調査事務局	北村 忠直	伊那市教育委員会教育次長
〃	石倉 俊彦	伊那市教育委員会社会教育課長
〃	有賀 武	課長補佐
〃	米山 博章	伊那市教育委員会社会教育係長
〃	沖村喜久江	書記
発掘調査団		
団 長	友野 良一	日本考古学協会会員
副 団 長	根津 清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調 査 員	飯塚 政美	〃
〃	福沢 幸一	〃
〃	田畑 辰雄	〃

上村遺跡は、長野県伊那市手良中坪上村部落に所在する。遺跡地までの道程は二通りある。一つは、伊那市街より東へ杖突街道を五㎞ほど行くと、美篤の上原部落に至る。美篤小学校付近の道路を左に折れて、杖突街道と別れて、北へ段丘崖を登りつめ、美篤の養老院を左手に見ながら、さらに北へ進んでいくと、目の前の広がつて見える集落が手良中坪であり、中坪のうちでも上村は北に位置し、野口と境を接している。もう一つは伊那市街より進路を北にとつて、上牧、野底、福島を通り、箕輪町境の卯ノ木部落の南で右に折れて八ツ手、下手良を通る道とがあるが、いずれにしても、双方とも距離的には大きな差はない。

四、地形・地質

当遺跡の地形・地質は今回の発掘した場所よりおよそ、南東へ百㎞ほどにある浜弓場遺跡を伊那市教育委員会が主体となつて、発掘調査を実施した。その報告書のなかに清水英樹氏が、微地形について詳細に触れてあるので、それを参考に記しておくことにする。『遺跡地は、伊那山脈の花崗岩を基盤となし、その上に棚沢川、滝ノ沢川によつて形成された丘陵地で、南東に傾斜し、北東にはほとんど傾斜をもたない丘陵地である。なお、高尾礫層の完全な露出は、東方の清水庵の崖にみられる。この礫層の上位に古期ローム（チヨコレート色）が堆積し、中期ロームが降灰堆積するまでに時間的間隔があり、風化され一部が残り、その上に中期ロームが降灰し、堆

積し、新期ロームが降灰するまでに時間的間隙があり、風化され一部が残り、新期ローム層の降灰がある。遺跡地の展開する高尾段丘は、美篤の天神山を形成した時代に次ぐ古い段丘で、伊那谷の河岸段丘は、古い方から、塩嶺面、高尾面（Ⅰ・Ⅱ）、大泉面、神子柴面（Ⅰ・Ⅱ）、南殿面、木下面（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）と発達しているなかの高尾面に相当する段丘面である。

遺跡地付近のローム層は三種類に分類され、下部から古期、中期、新期ローム層と呼ぶ。中期ローム層は、神子柴段丘面を形成した神子柴礫層と同時層であり、新期ローム層と一部同時層は、南殿・木下段丘面を形成した。南殿礫層、木下礫層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲである。また、高尾面を形成した高尾礫層と一部同時層となるローム層は、古期ローム層である。なお、古期ローム層中には六枚、中期ローム層中に五枚、新期ローム層中には二枚の浮石層が夾在する。これらの浮石の多くは、放射年代が判明している。』

第五節 歴史的環境

本節の内容についてはかつて昭和四十七年十二月に発掘調査を行い、翌年三月刊行された浜弓場遺跡報告書のなかの第一章環境、第三節・歴史的環境のなかで当時の調査員、また、今回の調査員である御子柴泰正氏の文章を全面的に引用させてもらうことにした。

『伊那市東部における天竜川左岸地域は、天竜川による河成段丘と、三峰川と棚沢川とによる合流扇状地から成り立ち、その上を厚

いローム層が覆っている。この段丘平面はほぼ三角形をした地形とみることができ、まずその東西辺は、三峰川により開析された一辺で、美篋天神山（八〇八m）から、伊那公園まで約五・七km、南北辺は天竜川による河成段丘で、伊那公園から箕輪町卯ノ木付近まで約五・五km、また天神山と卯ノ木を結ぶ線は、伊那山脈山麓で約五・五kmの一辺を支持している。この三角状台地の遺跡分布をみると、まず三峰川と天竜川の段丘上、そして伊那山脈山麓で、この三角地帯台地の三辺に当る部分と、その垂線ともいべき棚沢川周辺に濃密な遺跡の点列分布帯をみることができ、また標高は天竜川にのぞむ段丘上、六九〇m台に、弥生時代から平安頃までの遺跡、爪ヶ崎、上牧神社上（押型文）、長者屋敷、上牧、福島等の大遺跡が隣接し、また四〇基近い牧、福島古墳群がこの一辺に集中している。さらに七二〇mから七九〇mの間が、伊那山脈山麓分布地域で、手良に点在する大半の遺跡はこの中に入る。これらの遺跡を抱合するほぼ平坦なこの三角状台地は通称六道原と呼ばれ、古来より美篋地区の一部に六道地藏尊が祀られている。手良の地名が歴史上に登場するのは伊那地方では最も古く、平安時代・承平五年（九三五）倭名類聚鈔に手良郷が初見され、また手良の地名についても、古来より手良公と称する帰化人が居住していたと伝えられており、それを裏付けるごとく当遺跡北を流れる滝の沢川の上流には、大百済毛、小百済毛と呼ばれる二つの地名が残っている。手良に散在す

る遺跡数は、約50数ヶ所に達するが、そのほとんどが棚沢川による扇状地形上に存在する。棚沢川は伊那山脈鉢伏山（一四四五m）に源を発し、全長約九kmをもつて福島部落にて天竜川に合流する。その間、この扇状地は山麓特有の湧水による微開析により、湿地帯凹地面と舌状丘陵面とを数多く形成し、この舌状丘陵は絶好な居住性に富み、先史原史はもとより、古代高地性農耕文化としての村落形成にも理想的な地形である。手良における縄文早期遺跡としては、浜弓場の他、所洞、ワランベ、松太郎窪の三遺跡が上げられ、伊那山地山麓を北に辿れば、箕輪町卯ノ木に上金、澄心寺下、同三日町に栗飯、城近、萱野と押型文遺跡が続き、南に下れば、三峰川を越え北福地の三ツ木があり、さらに田原の駒形、宮ノ上と点在している。また手良付近における注目すべき遺跡としては、縄文中期主体の所洞、辻垣外、地神原、宮の平、東松、鳴神、狐垣外、松太郎窪等が見られ、晩期には火葬墓とみられる野口遺跡が存在する。また南垣外からは灰釉長頸瓶と人骨が出たと伝えられており、さらにこの南垣外から棚沢川に沿って、福島地籍まで約一・五kmの広大な面は、手良郷の所在地と目されている福島遺跡が続く。なお、笠原堂垣外からは古式土師器の良好なセットと住居址が露呈し、また古墳としては矢塚・山伏塚の二基が近くに存したが、共に現在は消滅した。特に山伏塚については、戦前までその付近から出土した石棒や石製品を八〜九本立てて、雁高大明神として祀り、またその道の病

を得た者が治癒すると、幟や石製品を奉納し、かなりの信仰を集めたと伝えられている。現在は水田となり、石製品の一部と雁高大明神の碑が本郷千春氏宅に祀られている。また、浜弓場遺跡南の貯水用堤を造った時、夥しい人骨がその湿地より出土したと伝えられている。

六、発掘日誌

昭和五十四年六月一日 発掘現場へ器材とテントをトラックにて搬入する。現場にトラックが到着して、ただちに、テント設営にとりかかる。テントは後背に丸山と呼ばれている中世城館址のあった、すぐ近くの休耕してある水田へ東西に細長く建てる。水田のために時節柄、梅雨時に入るので、排水を充分に考えて、側溝を掘っておく。

昭和五十四年六月二日 本日よりグリットを設定する。まず最初に丸山のすぐ南側の水田を掘り下げてみると、北から南への傾斜が急であり、中央部付近は北側の丸山の出張りがあったものとみえて、土層中にパミスを含む、第四浮石層があった。東側の方に深い地層があり、そのなかから古銭(寛永通宝)六枚とキセルの出土があり、両遺物とも録青が出て青々としていた。さらに、人骨の発見があり、近世の墓地であることが判明した。そこで、地主の向山氏に連絡すると、清水庵の尼僧と向山氏一族で供養をしてくれた。向山氏にその後の人骨の措置の仕方について話し合ったが、地主は同

氏の系統であるかどうかはつきりしないので、受けとるわけにはいかない。市で受けとり、共同墓地へ埋葬することにする。

昭和五十四年六月四日 昨日の墓地に花と線香をたてて先祖の霊を祈る。昨日、同様にグリット掘りを南、南へと進めていくと、深いところのグリットから馬の骨が発見された。掘ってみると、一部分しか骨が残っておらなかった。遺物の出土は少々あったが、遺物の検出は何もなかった。夕方までに、本水田に設定したグリットを掘り尽してしまふ。

昭和五十四年六月五日 本日は丸山のすぐ西側の北側の水田にグリットを入れて、掘り下げてはみたが、砂層の堆積が厚く、二mを掘ってもローム層はみられず、水が湧き出てきた。おそらく、遺構及び遺物の出土は何もないものと思われる。

昭和五十四年六月六日 本日は、昨日の水田のすぐ南側にグリットを入れてみるが、昨日と同様な状態で、遺構の存在はまず考えられないと判断して、発掘調査を終了する。

昭和五十四年六月七日 全測図の作製、テントをとりこわしてあとかたづけをする。いまままで、掘ったグリット及びその全景の写真をとる。人骨を丁寧に取りあげて線香を建て、手厚く葬むっておく。



図版1 位置及び遺跡分布図

遺跡の名称

- | | | | | | | |
|--------|-------|--------|--------|--------|---------|-------|
| ① 沢山 | ⑩ 矢塚 | ⑲ 東松 | ⑳ 小百濟毛 | ㉑ 六道原 | ㉒ 辻西幅 | ㉓ 林越 |
| ② ヨキトギ | ⑪ 野口畑 | ㉔ 古八幡 | ㉕ 近洞 | ㉖ 野口 | ㉗ 島崎 | ㉘ 菅窪 |
| ③ 蟹沢桜林 | ⑫ 金山 | ㉙ 鍛冶垣外 | ㉚ 上村 | ㉛ 下手良中 | ㉜ 堤林 | ㉝ 富士塚 |
| ④ フランベ | ⑬ 竜の沢 | ㉞ 中原 | ㉟ 社宮地 | ㊱ ？原 | ㊲ 山の田 | ㊳ 古屋敷 |
| ⑤ 入林 | ⑭ 鳴神 | ㊴ 石見堂 | ㊵ 宮の平 | ㊶ 大原 | ㊷ 神手原 | ㊸ 城山 |
| ⑥ 大上 | ⑮ 山伏塚 | ㊹ 二十平 | ㊺ 砂場 | ㊻ 松太郎窪 | ㊼ 日向畑 | ㊽ 浜弓場 |
| ⑦ 狐垣外 | ⑯ 丸山 | ㊿ 地神原 | ㊾ 清水洞 | ㊿ 南垣外 | ㊿ 笠原堂垣外 | |
| ⑧ 鳥ノ宮 | ⑰ 向田 | ㊿ 小萩原 | ㊿ 郷の坪 | ㊿ 角城 | ㊿ 堤下 | |
| ⑨ 辻垣外 | ⑱ 堂垣外 | ㊿ 大百濟毛 | ㊿ 柿の木 | ㊿ 垣外 | | |

七、まとめ

上村遺跡は当初では同遺跡地の後背にある丸山城跡との関連からして、中世の遺構、遺物の存在が強く考えられたが、実際に調査をしてみると、全く期待を裏切るような結果になってしまったが、わずかに知り得た知見をもとに簡単にまとめてみようと思う。地形については丸山のすぐ南側は現在水田にはなっていたが、水田造成以前にはこの丘陵状の台地がもう少し南側まで伸びていたものと思われる。この証明できうる事実は、第四浮石層が割合に浅い面にみられた。つまり、丘陵状であった面を水田にする際にかなりくずして平坦にしたために、このようなことができたのであろう。

西側の二枚の水田は、竜の沢川や棚沢川のとび重なる氾濫によって、砂層の堆積が多く、深いところでは三米にも達していた。砂層のなかに排水用の木製の暗渠排水が各所にみられた。

古銭六枚、キセル、人骨の出土は明らかに墓を有力視し、また、古銭は全て寛永通宝であり、近世の墓であると断定してよい。キセルの出土は男性であることを明確化している。

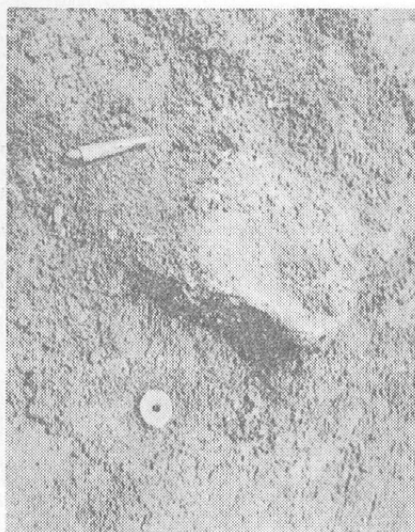
誰のものであるかは、地主様も知らず、またこの土地の近くの人々も、この地に墓があったことすら誰一人として知らなかった。察するに、旅人等の放浪人が行き倒れて、近くの住民たちがあわれんで、この地に埋葬したものと思われる。



図版2 遺跡地遠景（南側より眺む）



図版3 ゲリットを掘り上げた状況



図版4 古銭キセル出土状況



図版5 発掘風景

